川上　高司　ブログ　アーカイヴ

2017年

4月7日

既視感のあるトランプ政権

トランプ政権では国務省の予算が３０％ほど削減される一方で、国防総省の予算は大幅に増加する。アメリカは明らかに国防総省が主導権をとるであろう政権になっていくことがはっきりした。まるで 8 年前に時計が戻ったかのような既視感を覚える。

その既視感をさらに強く感じるような人物がトランプ大統領の周辺でうごめいているとしたらなおさらだ。

ブッシュ政権時代には戦争は外注化され、民間軍事会社が乱立し一大産業へと急成長した。そのうち最強で最大の規模を誇ったのがブラックウォーター社である。創始者はキリスト教最右派のエリック・プリンスで、彼は米海軍特殊部隊 SEALS 出身である。ブラックウォーターはイラク戦争とともに成長し莫大な富を築いたが、やがてその強引な手法が国内外で批判を浴びたためプリンスは社名を変更し、後に同社を売却した。現在は香港に拠点のある民間軍事会社を経営している。

プリンスは昨年の選挙の際にはトランプを支持し多大な寄付もした。トランプ政権で最も権力を持つバノンとも近く、今ではトランプの個人的な大使という役を担っている。最近アラブ首長国連邦の国王の仲介でロシアの要人と非公式に会合を持ったという。その狙いがどこにあるにせよ時の政権と結びついて軍事を請け負い、財産を築くというスタイルを再び目論んでいることは間違いない。ウクライナかシリアでプリンスが暗躍する日もそう遠くはない。

アメリカの外交政策がオバマ政権時代の国務長官が主導権をとったスタイルから大きく転換していくことは間違いない。

4月17日

国務長官の存在の耐えられない軽さ

今回のシリアへの空爆は、2003 年イラク侵攻をリプレイしたかのようである。2003 年侵攻に先立つ 2 月の国連会議では、イラクが生物化学兵器を隠し持っていると当時のパウエル国務長官はその生物化学兵器が入ってるとされる試験管を振りかざして主張した。シリア空爆ではアメリカの国連大使が「サリンが使われた」証拠として写真を振り回して主張していた。国連大使の様相がパウエルかと思われるほど既視感が強い。

まったく既視感の強いトランプ政権だがさらに過去の亡霊が蘇ったような政策が発表された。国防総省は、ソマリアへ米軍の部隊を派遣したと発表したのである。派遣されたのは陸軍の１０１空挺部隊である。101 空挺部隊はやはりイラク戦争時、ペト

レイアスが指揮しイラクやアフガニスタン戦争で活躍した精鋭部隊である。今回の派兵はソマリアのアルカイダ系過激派をたたき、現政権を支えることが目的だという。1993 年以来、米軍がソマリアの地へ降りるのは実に 24 年ぶりである。

1993 年、当時のクリントン政権はソマリアの内戦に介入し部隊を派遣していた。米軍は首都モガデシュでの作戦中ブラックホークが墜落し、その乗員の救出のためさらなる部隊を投入しわずか 1 日で 18 名の戦死者と多数の負傷者を出した、最悪ともいえる失敗をしている。クリントン大統領は直ちに軍を撤退させた。

ブッシュやオバマ政権時代ですらソマリアには空爆はするものの地上部隊の派兵はしなかった。ところがトランプ政権になるや否や派兵が行われることになり、なぜ今ソマリアなのか、疑問符がつく。

政権内で重要ポストを軍出身者が占め、国防総省の予算が増え軍の影響力が増す。トランプ大統領自身が「強いアメリカ」を標榜し力の行使に躊躇しないとなれば、この先の世界は常にアメリカの力の行使におびえることになる。今のトランプ政権は、好戦的と言われたブッシュ政権時代よりもさらに前のめりになっている。その一方で国務省は予算が削られ国務副長官すら決まっていない。テラーソン長官がすべて 1 人でこなしているが、存在感の軽さは否定できない。これほどに国務長官が軽んじられる政権はまさに新たな歴史と言えよう